

婦人教育



外村てい

婦人教育ということは人にどういう印象を与えるだろうか。婦人教育とは大衆である婦人が勉強するために援助しようとするものである。幼稚園教育とは直接に関係がないかもしれないが日本全体の婦人の問題として自分の仕事とどういうつながりがあるかを考えて読んでいただきたい。

幼稚園、学校教育は人格の形成を目的としている。一般社会教育も文化社会の成員にふさわしい人格の形成をめざしている。幼稚園児と同じようにお母さん達もよい社会人として一生勉強を続けるのである。立派な人格の形成とか人格を完成するとかいうことは物知りになることではなく、その社会を幸せに立派にしていくだけの考えや態度や実行力を持つ人になることである。こういう人になりたいとは誰しも、たとえ無学文盲のお母さんでも腹の底では素朴に考えているが、皆忙しいし、一人で考えただけではその場限りで消えてしまう。こういう一般

婦人がなんらかの形で社会につながりを持つようにするのが社会教育の目的である。

人格の完成というけれど、この人格とはなんだろうか。人格の要素には個人性と社会性があると考えられる。社会性というのは人間が社会化すること、人と人との関係において自分が人に対して責任を持つこと、人の意見をよくきく態度である。社会性が身につくと視野が広まり、自分のことだけでなく人のことも考えることができるようになる。例えば自分の子どもだけでなく全部の子どものことを考える。また社会性があるというのは社会に適應できる自分であること、社会的に協調していくことである。日本婦人は女であること、家庭の主婦であることのために社会化を妨げられてきたが、ものを考える時や判断をする時に、義理人情ではなく社会的意義の上で協調できることが望ましい。

次に個人性について考えてみよう。言うまでもなくこれは人間が個別化すること、自分自身を掘り下げ自分を反省して客観的にみつめること、自分というものを知らることである。

社会性ばかりあって個人性がなければ釣り合いのとれない人間ができてしまう。この釣り合いができていくところに円満な人格ができる。自分をひきしぼりよく反省することによってその人の社会性がより望ましい形で表わされる。人間が社会化することは結局分化することである。未分化の状態では一つのことしか考えられない。分析力判断力がない。子どもの問題でも社会が悪いんだと一言のもとに片づけてしまうのは未分化な状態である。世の中のこととは世の中のこととして自分と関係のないものとしてしまう。人から言われたことをうのみにする。いろいろなことを多面的に知ろうとしない。たとえば三、四年前に神奈川県養老院で火事があった。そのことについてある婦人会の会員の話すのをきくと、「養老院に行くなんていやね」「おばあさん達かわいそうね」というように一言で片づけていた。もっと立派ながっちりした建物を建てようという意見が出されてもいいのではないかと思う。

一面的というのは平面的であるということ。物事を自分で考えてみて本当に理解して自分のものとしてとり入れる、そこから平面的でない人間、立体的な人間ができてくる。だから、あ

の人の言うことは進歩的だからその人の言うことをきいていけば進歩的だと思う、などというのはおかしい。女性も男性と同様に権利と義務を持つ以上立体的な態度が必要である。

分化するということは女だけで考えるのではなく男の人の言うことも老人の言うこともきいて受け容れていくことである。時代の縦の流れを尊重しながら今日の位置を確めていくことが必要である。

一面的な未分化な状態では社会的しきたりを大事にする。たとえば足入れ結婚が今だに残っている。新生活運動の一環として講演会をもよおしながらしきたりはそつとしてある。基盤が基盤だから慣習をうちやぶるのは難しいのである。婦人会、青年団の活動も盛んであるが社会的に根強い問題がまだ残っている。家の中の暮らし方の中にも、物事の本質よりも慣習に支配されていることが多い。

昔は、娘で働いていればよほど貧しいか欠陥があると思われる。今は、娘が働くことは一般に認められ自由になっている。しかし意識の点ではどうか。自分の月給を親に渡さずひとりで使ってしまう。娘には娘の、母には母の生き方があるが、そこにつながりがない。若い時代こそ柔軟な目で社会をみつめることができるはずであるのに、一面的な生き方をしていく人が多い。

個人性があるということは個性があるということである。よい意味での個性があるとは、ひとくせある傾向を持っていることではなく、自分をよく知りできるだけ自分の気持のよい状態に持っていくようにすることである。これは人の気持を理解しようとするに通じる。自分のことを考えたことのないお母さんが子どもの気持を考慮ができるだろうか。お母さん方の浅はかさが、なんでもないことを何事かあるように考えてしまい、複雑にしてしまう。母親が卒直に話し合う態度を身にかけていれば子どもが高校生になってもオロオロすることなく、そっとしておく時にはそっとしておくことができる。母親は子どもをめぐる外界を口ばかりでなく眼や頭を使って知り判断していく必要がある。

家庭を守るというのは地域から閉鎖してしまうのでなく、他の家庭や社会とのつながりの中で守ることである。

結局、我々は個人性と社会性というものを釣り合いのとれた形で身につけることが大事である。それが円満な人格の完成であり、我々が一生勉強することの目標はここにあるのである。

以上婦人教育の目的についてのべたけれど次に実際にどのような問題があるかを地域別にみてみよう。現在婦人の学習は盛んであり婦人学級は全国で二七〇〇を数える。婦人学級というのは婦人がある時間あることを系統的に学習することであるが

ほかにも多くの学習グループがある。戦後、お母さんのしなくてはならないこと、知らなくてはならないことが急にふえてきたから、このままではいけないということに気がついてきたもので、その対象は一般のお母さん達である。

農村の重要な学習課題は嫁と姑の問題である。あるアンケートで自分の娘は高校、大学まで出したいが嫁は中学卒の人をもらいたいという結果が出た。自分の娘は農家に嫁にやりたくないが嫁には働く一方で使いやすい方がいいという自分の都合だけを考えた現われだろう。矛盾した気持である。農村のお母さん達は閉鎖的な環境にある。だから人の集まる場所に集まることを喜ぶ。家の中には縦の関係があつて羽根をのばせない。そしてそういうところで話されることはうわき話が多い。社会的なことではなくまわりのことに気をとられる。

では商店街の婦人学級はどうだろうか。ここでは物価、景気不景気、稼業がどうなるのか、などが問題である。それから、子どものことでは、その都度主義の小遣い、店員の持ち込むマスコミの問題などで悩んでいる。

団地、山の手の婦人学級にはインテリ層のお母さん達が集まっている。食物や衣服のことは自分の才覚で処理できるので子どもの教育が大きな問題である。他人の生活には干渉しないが自分の生活ものぞかれない。そういうお母さん達は高度の理諭

を望むが具体性に欠けている。自分の生活体験からもってきたものではない。そして自分自身の生活の中で安定している。学歴はあっても社会性があるとは言えない。

このようにその土地柄や階層によって生活意識に一つの傾向がある。しかし共通する心理がある。それは、もののわかつたお母さんになりたい、子どもから支持されるお母さんになりたい、子どもを幸せにしたい、身の立つようにしたい、多忙に追われてこのまま老いくちたくない、自分の生活を便利で気持ちいいものにしたいたいということである。これが皆の気持ちで、一部の人はこのへんでもう少し社会のために役立ちたい、自分の趣味をもっと生かしたいと思っている。

学習の仕方は学校の生徒のようにはいかなない。同一年令ではないし生活経験が異なるから難しいが、学習に参加しようとする気持は同じである。次にお母さん達の学習の経過を示してみよう。

- 一、漠とした不安、心配
- 二、問題意識——何が問題か
- 三、解決への欲求
- 四、学習意欲
- 五、学習の発展
- 六、実践

今日ほどたくさんのお母さん達が自由意志で学習の場に参加していることは今までにない。時代の移りかわりの中でお母さん達が次の世代にバトンを渡すよい渡し手となるために勉強しているのである。我々は勉強するお母さんを尊敬しなければならぬ。

最後にある働く少女の作文にあらわれた母親の話を引用しよう。

「私のお母さんはお父さんが亡くなってから私達子ども三人を女手一つで育ててくれた。ある朝目がさめるといつも台所でするコトコトという音がきこえない。お母さんのふとんはカラッポである。私は一体どうしたのだろうかと思ってお母さんの姿を探したがどこにもいない。不安になってきた。その時広い庭のはずれの方で一・二、一・二というかけ声がきこえてきた。急いで行ってみるとお母さんが一人で朝の日の光を浴びながら体操をしているのだ。私は本当に嬉しくなって兄さんに知らせに走った。」

要するに、自分が子ども達のためにどれほど心血を注いできたかをくどくどと愚痴まじりにのべ、そのまま老いていく母でなしに、年はとつても、子らと共に、なおかつ、前進する母の姿こそは、子ども自身にとって、何よりも喜びなのである。

(文部省社会教育局婦人教育課長)